

＜書 評＞

WGIP(ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム)と歴史戦
(モラロジー研究所)

高橋 史朗 著

書評者：ジェイソン・モーガン

2015年、数百人の米国人教授が、日本政府を攻撃する「日本の歴史家を支持する声明」に署名した。日本が表現の自由を侵害したと主張したのである。2017年には、この署名には加わらなかったデービッド・ケイという教授が、同様に、日本が表現の自由を侵害していると非難する国連報告書を提出した。

米国人は人の事に口を出す前に、自分の国の歴史をもっと読んだ方がよかったのではないか。

著名な歴史学者高橋史朗氏による本書は、米国政府、とくに連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー大将の指揮下にあった総司令部が、第二次世界大戦の終わった後の数年間に、日本人大衆に対して、検閲・ウソ情報拡散、洗脳など、ありとあらゆる言論封殺を行ったという事実を証明している。

この心理作戦の名前は「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」(略してWGIPと呼ぶ)。その目的は、嘘の情報を拡散し、日本人の心の中に、ワシントンDCの要求に合致する歴史観・政治観を注入することだった。その結果は、輝かしい成功を収めたのだった。

なんのことはない。現在、世界日本が表現の自由を侵害していると言いつけている国は、かつて歴史上例を見ないほどの厳しさで同じ罪を犯した国だったのだ。

そのいい例がルース・ベネディクトだった。この人は、デービッド・ケイと五十歩百歩で、日本研究に携わった経験など無きに等しかった。それでいながら、日本人の心理的な「地図」を作成すると称して、かの、世を震撼させた「菊と刀」(1946年)という著作を遺した。ベネディクトは、日本人がみんな遺伝的に精神分裂病を患っているという妄想を作り出した。そして、まさしくその虚構の上に、戦後の米国の占領政策が確立された。日本の敗戦の後、米国は強硬な検閲を実施した。高橋によると、ベネディクトの作り出したイメージが、検閲という文化を許容する基盤になったのだという。ベネディクトは、オピニオンリーダーではあったが、同時にあの時代の風潮に流された庶民の代意でもあった。日本人はずるくて二枚舌を使う民族だというイメージは、当時の米国では典型的な差別表現であり、米国人の日本に対する反感を煽るために絶大な貢献をした。戦争をしたくてたまらないルーズベルトにとっては、願ってもないことだった。

言うまでもなく、米国のプロパガンダマシンとなって働いた学者は外にもたくさんいた。ベネディクトの同僚だったマーガレット・ミードもまた、戦争情報局(OWI)で

熱狂的に反日プロパガンダに従事していた。そして、この戦争情報局こそ、米国の諜報活動・破壊活動の工作機関であり、後に、戦略諜報局に吸収され、最後にはアメリカ中央情報局（CIA）の一部局となった悪名高い組織だった。

ミードもベネディクトと同じように、有名ではあるが、荒っぽい論理を振り回す人類学者だった。現在ミードがよく知られているのは、サモア人に関する著述である。東洋人に対する偏見をこれでもかこれでもかと並べ、サモア人は原始的で性意識過剰な人々だというイメージで描き出したことである——人種差別をする白人特有の優越感に満ちた定義づけであり、後になってから、良心的な学者たちから徹底的に反駁されることになった。この人は何のためらいもなくこんなことを信じる人だった。だからこそ、米政府に重用されるに至ったのである。日本に関する神話を捏造し、普及させるためにはどうしても必要なタイプの学者だったのである。

この高橋の著書は、ベネディクト、ミードを始めとする米国の学者たちが、熱狂的に米政府に迎合して、歪んだ日本像を作り出した様子を細部に到るまで見事に描き出している。それは、米国の軍部と好戦的な政治家たちにとってどうしても必要な作業だった。日本人とは、世界を支配しようという狂気に駆られた民族ではあるが、一方では従順な面も持っている、と彼らは考えた。厳しく忍耐強く教育してやれば、最終的には米国人宣教師の民主主義を実現させようという「再教育」の努力が実を結ぶはずだった。かくして、戦前、戦時中、戦後に、それぞれ米国が東アジアにどのように干渉の手を伸ばしたかという事情が、WGIPを分析すればよく分かるというものである。

高橋の本書の中で、特に注目すべき記述は、ウォーギルトインフォーメーションプログラムが今なお生きているということである。米政府および御用学者たちが作り出したこのプログラムは、今でもまだ、米国が日本を扱う基礎になっているというのである。米国の学者や政府高官は時々日本政府に対して高飛車な態度を取ることがある。そんな時にはいつも、彼らは、二世代前の御用学者たちが定めた路線を忠実に辿っているだけなのである。

残念なことに、被害はそれだけでは終わらなかった。米国が日本に仕掛けた心理戦は、日本社会に浸透していた共産主義勢力にたちまち踏襲された。彼らは、教育制度の分野に浸透し、まったく自発的に、ワシントンの反日プロパガンダをその後何世代もの学生たちに教え込んでいる。現在でも依然として、日本人の自国に対する歴史観は、1940年代以来、日本人大衆に押し付けられたウォーギルトインフォーメーションプログラムという宣伝工作を実質的には鸚鵡返しに語るものである。

このプログラムは大成功を収めた。プログラム自体の存在を隠蔽することにまで成功したので、ごく最近まで、一般にはほとんど知られていなかった。日本の学者であり、かつては左翼だった江藤淳（本名・江頭淳夫）は晩年に名著「閉された言語空間」を発表した。これは、米国占領軍の検閲政策を糾弾したものだ。最近素人の歴史研究者の関野道夫がWGIPについての研究論文の冊子を出している。日本では他にも研究者や

知識人が、この問題に関心を示している。その結果、WGIPに関するエッセイや記事が新聞や雑誌に以前よりもはるかに頻繁に見られるようになってきている。それでもやはり、日本人も外国人も、自分たちが学校で習った「日本史」が実は米国が作り出したフェイクニュースばかりだったとは、夢にも思っていない。

高橋の「WGIP(ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム)と歴史戦」の出版によってこうした事情は確実に変わって来ると思われる。高名な歴史学者である高橋は、何十年にもわたって、このテーマの研究を続けている。高橋は、日本、米国など多くの国の公文書館で史料に当たってきた。学者人生をかけていると言ってもよい。今、「WGIPと歴史戦」は彼の著作の一つとなった。彼の著作は、真面目に学問に取り組んでいることが分かるものばかりである。しかも、ほとんど全面的に、自分が直接に調べた一次史料に依拠している。たとえば、2014年に刊行した米国の占領に関する著書がある。これを書いたときには、日本と米国の公文書館の書類を徹底的に調査した。250万ページに目を通したとのことである。経験主義的な研究の典型とも言うべきもので、これほどの歴史的著述の力量を持つ歴史家は他にはほとんど見当たらない。

それにしても、米国の学界で、一体どのくらいの学者たちが、自分の保身を願わずに、高橋のような公正な態度を取ることができるものだろうか。今も昔も、米国の教授たちを待ち構えているのは、権力と金の誘惑である——例えばオーウェン・ラティモアという人物がいた。太平洋問題調査会の元調査部長であり、戦争情報局(OWI)の部長であり、ソ連のトップクラスのスパイだった——この男も、米国の政権に取り込まれて、恒常的に日本を誹謗するプログラムに加わった。この二十年、中国の勃興が著しい。ところが米国の学者たちは、警戒心を強めるどころか、ルーズベルトの神話を繰り返すことにより、日本を貶めようとするのである。

現に、高橋のこの著書は、一節を割いて「歴史戦」を詳細に分析している。歴史戦とは、長年にわたって、日本と米国の学界を巻き込んだ論争であるが、一番最近のものは2015年に起った。とは言っても、所詮はウォーギルトインフォメーションプログラムの要点を焼き直したものに過ぎなかったのは異とするに足りない。目から鱗が落ちるように感じさせてくれる点がある。本書は、米国の学界に巣食うイデオロギーを見事に分析してくれていることだ。米国は昔からずっと、広範囲にわたって反日プロパガンダを行って来た。このことを理解しなかったら、政治的偏見に捉われた米国の教授たちが、何故に、日本文化全体に対して、あのような理不尽な攻撃を仕掛けているかを筋道立てて説明することはできない。現代はWikileaksによって機密情報が暴露される時代である。ところが、その一方で、政府関係のハイテク機関が、米国の学界・政界のエリートにとって不都合な意見をすべて抹殺している。そうであるからこそ、我々はウォーギルトインフォメーションプログラムを再検証してみる必要に迫られている。そうしないと、現在の「閉された言語空間」がどのようにして生じてきたのかという経緯が闇の中に葬り去られてしまうことになる。

高橋の著書とエッセイの原文は日本語である。しかし、彼の著述をできるだけ速やかに英語などの他言語に翻訳して欲しいものだ。二十世紀の日本の歴史を理解したいと望む世界中の善意の人々は、どうしても高橋の著作を読む必要がある——まず最初は、この輝かしい本書、刺戟的な「WGIP と情報戦」からだ。

Jason Morgan is associate professor at Reitaku University in Chiba, Japan.
ジェイソン・モーガンは、日本の千葉にある麗澤大学の准教授である。